EurekaXI

六年制通信　№22　令和５年10月20日（金）号

競争のない学び

アメリカの州（市）の名、ニューヨークにはどんな意味があるのか。愛用の語源辞典によると、もともとはオランダの植民地としてNieuw（=New）Amsterdamと言っていたそうです。しかし1664年にイギリス領となり、ヨーク公（Duke of York、のちのJames2世）にちなんでNew Yorkとなった、とあります。もしこの話を司馬さんが授業中に聴いていたら、あの膨大な作品群は生まれなかったかもしれない…。

以前ひょっとしたら紹介したかもしれませんが、司馬遼太郎が中学の英語の時間に質問をしたのですね。ニューヨークという地名にはどんな意味があるのかと。そうしたら担当の先生が「地名に意味などあるか！」と叱るような答え方をしたというのです。実は研修旅行の関係で三年生に吉田松陰の話をすることになって、司馬さんが松陰の生涯を描いた『世に棲む日日』（全四冊）を読んでいたので、司馬さんのエピソードをあれこれ思い出したというわけ。で、その叱られた英語の時間以来、司馬さんは英語の授業をボイコットします。試験は受けましたが白紙で出します。もちろん先生の対応はいけません。生徒の質問に対して、教育者として最もやってはいけない部類の答え方です。しかし、司馬さんの反抗も凄まじいですね。中学の授業でと言いましたが、司馬さんは大正生まれですから当時の中学は今の高校です、念のため。

さて、学校に嫌気のさした司馬さんは図書館にこもって勉強します。洋の東西を問わず図書館中の本を好奇心と感受性に従って好きなだけ好きなように読み漁り、ついには読むものがなくなり将棋の本まで読んだとか。この話で、感心するのは高校生の段階で非常に高いレベルの読書力を持っていたということです。のちに司馬さんは、こと文系に限れば学校はいらない、図書館があればいいと言っています。私の立場としては反論せねばならないのでしょうが、司馬さんほどの読解力のある若者ならそうかもしれないと思ってしまいます。このころの司馬さんの勉強（読書）の特徴を考えてみると、競争に根ざしていないということでしょう。私はそう思います。昔も、もちろん今も、中学高校の勉強は残念ながら競争としての学びといった側面が確かにあります。中学生は高校への、高校生は大学への進学切符を手に入れるため入学試験を受け、合格しなければいけないのですから、当然同じところを受ける生徒たちに勝たなくてはなりません。国語の問題を読んで感動している暇などありません。質問に素早く的確に答える、それが競争に勝つということです。司馬さんはこの時期そういうことを恐らく意識していなかったのではないかと思われます。そして、本当の意味で、学ぶという体験をし、学ぶ楽しさを知ったのではいかと推測します。

しかし競争をベースにした学びは本当の学びではない、そう言い切れない部分もあります。競争が勉強するモチベーションになり得るからです。大学入試（というか入試問題）がなかったとしたら、中学高校でどの程度のレベルを教えていいのかわからなくなるのも事実でしょう。それはそうですが、しかし、昨今は科目が多すぎます。共通テストでは新規に「情報」が必須となり高校生の負担は増すばかりです。だから受験が終われば勉強しなくなる学生が山ほど出るのではないでしょうか。司馬さんは図書館で好奇心と感性のままに学んだに違いないと思いますが、今の中学生高校生にそれをする時間が十分にあるとは思えません。大体科目が多いと、頭の中がざわつきます。騒がしくなります。落ち着いてもう少し深くもう少し広く勉強し、生涯にわたって学び続けられる領域を見つけるのも容易ではなくなります。真理の探究とは寂(しず)かなものです。長崎の如己堂、あそこに永井博士の詠んだ句碑があります。「玉の緒の命の限り吾は行く　寂かなる眞理探究の道」、ざわつきもなく落ち着いた、そして孤独だけれど自立した精神が真理の探究にまっすぐ向かっているさまが伝わってきます。

俗にいう偏差値教育は勉強を競争の手段とみなしています。今の制度そのものがそうなっているのです。そこでは自分の好奇心も感性も納得のいくまで問うことも、時間をかけて考えることも、「時間の無駄」と切り捨てられる危険性があります。君たちはこのことを十分に認識したうえで、進学しても社会人になっても学び続ける大人になってほしいと思います。それが、何度も言いますが、本当の学歴ですからね。

今週のおすすめ

・清水　研　『もしも一年後、この世にいないとしたら。』　（文響社）

癌専門の精神科医及び心療内科医のことを精神腫瘍医ということを初めて知りました。清水さんは老若男女、癌に罹患した患者さんと面談を繰り返します。その方々の心の変化、清水さん自身の変化、多くの癌患者がどのように考え癌と向き合い、残された自分の人生をどのように過ごそうとするかを豊富な実例で語られているのが本書です。

死を意識して初めて一日を生きることの意味を考え、さまざまな後悔に苦しみながらも、当たり前と思っていた日常が実は当たり前ではない、文字通り「有り難き」ことなのだと気づく、そのことで感謝の心が芽生える。そんな記述もありました。私はニール先生の Live every day as if it were your last.という言葉を何度も思い出しながら読みました。しかし、今日を最後の一日だと思って生きているかといえば、やはり当然のように明日は来ると思って生きていると告白しないわけにはいきません。

死とは何か。人生とは何か。死生観を持つとはどういうことか。死後の世界はあるのか、ないのか。この本には多くの人が様々な言葉にすがる様子も書かれています。やはり、ここぞという時、人は言葉を求めるのですね。改めてそう思いました。

昔のギリシア人は、人は一つのモイラ（運命）で満足すべきだという発想があったようですが、時にモイラは理不尽な運命を与えてくる、それをどう受け止めていたのでしょうね。この辺り、もう一度勉強してみようと思います。

BGM は KOH＋ の *最愛* でした…。